

博士論文（要約）

独立後カンボジアにおける自国史叙述の展開（1953－2018年）

新谷 春乃

本研究は、独立後のカンボジアにおいて自国史叙述がいかに書かれ、捉え直され、創り出されたのか、人々の歴史認識を形成する上で重要な歴史教育や歴史政策、メディアの中で表象される自国史叙述に焦点を当て、その展開の特徴を検討するものである。カンボジアは独立以降に体制転換を繰り返し経験した。国家の担い手となった政治主体は、国民国家「カンボジア」という枠組みを維持しつつ、前体制の価値を否定し、新体制を支える新たな価値を広める必要があった。本研究の対象となる自国史叙述もまた、その変化の波の中で見直しが迫られた。

カンボジアにおいて、自国史叙述はナショナリズムやナショナル・アイデンティティと深く関係している。先行研究ではその創造期にあたる植民地時代に焦点を当て、カンボジアの自国史叙述の創造とナショナリズムとの関係が検討されてきた。その一方で、独立後を射程とした研究は、為政者の一時点の発言を検討した体制別の静態的分析が中心であり、為政者による時期別の語りの変遷や、歴史教育や歴史政策、またメディア上に表れる自国史をめぐる議論など動態的かつ複合的に自国史叙述の展開を検討したものはない。本研究では、複合的かつ動態的に独立後のカンボジアの自国史叙述の展開を検討し、その通時的特徴の変遷を明らかにした。

検討するにあたり、本研究では多元的な歴史叙述の場を対象とした。第一に公的な歴史叙述の場である。厳しい言論弾圧が課され続けてきたカンボジアでは、このような公的な場が主たる歴史叙述の場であった。第二に、在野知識人による歴史叙述の場、そして第三に地下活動下における歴史叙述の場である。これら第二、第三の場は、公的な歴史叙述と寄り添うこともあれば、対抗言説となることもあった。

以上の分析をする上で、本研究の方法は、カンボジア国内外における多言語文献資料の収集と言説分析、そしてインタビュー調査で構成される。第1章では、自国史叙述の背景となる独立前夜からのカンボジア近現代史を概観するとともに、歴史叙述を取り巻いた言論環境の変遷を描写した。その上で、独立後のカンボジアにおける歴史教育の史の変遷を、学習指導要領、教科書とその執筆者に焦点を当てて、通時的に明らかにするとともに、独立後のカンボジアにおいてどのような歴史叙述が注目、議論されてきたか指摘した。それをもとに以下の観点から検討した。

第一に、過去にカンボジアを支配した対外勢力、つまりカンボジアを消滅させうる他者をめぐる叙述を検討した。国を滅ぼしうる他者の脅威に関する歴史叙述は、1979年まで外部の存在によるものとして描かれた。第2章ではその外部の他者をめぐる議論について、カンボジアと歴史的に支配関係にあった隣国タイとベトナム、そして旧宗主国であるフラ

ンスを検討した。独立直後にその植民地統治をめぐる歴史叙述が転換されたフランスや、歴史文化遺産をめぐる国家間の抗争時にその歴史やカンボジアに対する姿勢が想起されるタイと比べて、ベトナムは様々な契機に問い直された。その問い直しは5つの画期に分けられる。ベトナムのカンボジアに対する加害者性が自国史の中で強化された時期、共闘の歴史を前景にした公的な叙述と加害者性を強調した地下活動の叙述が併存した時期、そして反ベトナムを掲げる政治勢力が帰還し、過去の隣国の侵略を批判した歴史書の出版や歴史教育が展開された時期というように、その振れ幅は大きかった。このようなベトナムをめぐる自国史叙述はベトナムの軍事的・政治的脅威、またそれに関連したプロパガンダに規定され、公的な場、在野知識人の場、地下活動の場で異なる歴史叙述が展開された。

カンボジアの消滅に関わる他者は、民主カンプチア体制崩壊後、外部の他者だけでなく、内なる他者へも向かうようになった。第3章ではこの新たな被害者意識の形成とその展開を検討した。民主カンプチア体制崩壊直後から、民主カンプチア時代をめぐる新しい自国史叙述の創出を担ったのが、歴史教育と歴史政策であった。民主カンプチア時代の被害者と加害者が社会に混在する状況において、一部の指導者に民主カンプチア体制のジェノサイドの罪を負わせ、他の人々は皆彼らの被害者であったという語りを構築した。その後、民主カンプチア体制を担った政治勢力の投降や裁判など、民主カンプチア時代をめぐる政治状況が変容する中で、民主カンプチア時代をめぐる教育は、学校教育の現場から一時姿を消した後、クメール・ルージュ消滅後に再び復活した。しかし、パリ和平後の政治の描き方をめぐって歴史教科書が回収される事態が起きた。新たな展開はカンボジア特別法廷の設置後に見られ、現代史を含んだ歴史教科書が再版・改訂された。その後、市民社会からの民主カンプチア時代の記憶化をめぐる要請を受けて歴史教育の拡充が目指されるとともに、その時代を想起する「記憶の日」が制定された。

このようなカンボジアを滅ぼしうる内外の他者をめぐる歴史叙述に対して、歴史上のカンボジアの指導者たちがどのように向き合ったのかという点もまた、独立後のカンボジアの自国史叙述をめぐる展開の中で繰り返し問われてきた。第4章では王というカンボジアの伝統的統治者をめぐる叙述を検討した。王をめぐる歴史叙述は3つの画期に分けることができ、この時期区分は王制と国内政治に対するシハヌークをめぐる位置付けによって規定された。シハヌークが統治した独立後間もないカンボジア王国において、シハヌークは個人の威信を高める歴史叙述、歴史教育を展開した。その際に、過去の王の業績を引き合いに出して、シハヌークの政策を正当化するなど、王の歴史を利用する傾向も見られた。特に力を入れたのが、シハヌークの曾祖父にあたるノロドム王に関する歴史叙述であり、

国を護った抗仏英雄としての歴史像の構築を試みた。1970年にシハヌークが追放されると、王をめぐる歴史叙述は大きく転換した。内戦が激化する中、王は護国の観点から捉え直され、外国による支配をもたらした王は厳しく批判された。王制からの体制転換によって、16世紀の篡奪王スダチ・コンの歴史に対する注目が集まり、在野知識人による独裁批判に利用された。シハヌークは国家の敵と見なされ、シハヌークを独裁的、封建的と批判する歴史叙述が主流となった。そのような流れは、シハヌークの帰還と王制復活が決まった1991年のパリ和平を契機として再び転機を迎えた。シハヌークの現代史上の名誉が回復された一方で、すべての王の歴史が復権されたわけではなく、内戦期に見られた護国の観点を重視した王の歴史が再利用され、新王国時代の王をめぐる歴史叙述は、独立後の歴史叙述のハイブリッドの様相を呈した。

カンボジアを護る指導者をめぐる議論において、第5章では、1985年以来首相の座にいるフン・センによる英雄をめぐる議論を、王党派である対抗政党が力を持っていた時期、そして人民党が一党支配体制を確立した時期に分けて検討した。王党派の対抗政党が力を持っていた時期、フン・センは政敵であるラナリットに対する攻撃を正当化するためにスダチ・コンの歴史を利用し、その歴史叙述に介入しつつ、不適切な王（王族）の排除を正当化する言説を展開した。スダチ・コンの歴史は、非王族の政治アクターが実質的な権力を握る中で、過去または現在の王（王族）との関係を再定義する格好の材料であった。その後、人民党が一党支配体制を確立すると、フン・センは自らを現代史上の英雄とする歴史叙述を展開するようになり、現代史叙述の再編に着手した。現代史上のカンボジアの様々な政治場面において、フン・セン個人の功績が集中的に称揚され、2018年末にはその功績を後世に伝える場として記念碑が建立された。

このような国を護る指導者に関する歴史叙述は、政治権力が個人に集中した時期と、王（王族）との権力闘争が行われた時期に分けて説明できる。前者は競争相手がいるものの個人が強大な権力を持った時期であり、その個人を護国の英雄として称揚することが重視され、歴史教育や歴史政策の中で強調された。一方、後者は社会変動の中でアイデンティティが揺らぎ、脅威にさらされていた時期であり、王が伝統的統治者として君臨していたカンボジアの指導者像の再定義がなされた。

以上から、他者をめぐる歴史叙述は、様々な契機に見直され、叙述される段階の対外関係やそれを利用したナショナリズムに規定される傾向が見られた。一方で、護持者をめぐる歴史叙述は、指導者の転換を伴う政治的転換や過去の指導者の帰還が決定した後に見直される傾向があった。その見直しは、王を含む指導者に関する政治的転換が起こったからこそ可

能になったことであった。護持者をめぐる歴史叙述は、他者をめぐる歴史叙述と不可分に結びついており、他者をめぐる歴史叙述で注目された内容が、護持者をめぐる叙述の中に取り込まれることで、人々に受け入れてもらいやすい護持者像を提示しようと試みられた。

一方で、その転換を反映する歴史教科書の書き換えは、国内政治が変化してから遅れる傾向が見られた。その遅れの原因は、叙述の担い手や政治的問題によるものであった。独立後のカンボジアの歴史教育の史的変遷もまた体制転換の影響を受けつつも、その実質的な変化には時差があり、その時差こそが歴史教科書を執筆する難しさを示している。

独立後のカンボジアの自国史叙述は歴史が叙述される現在との距離が非常に近く、その構築の過程は必ずしも容易ではない中で、従来の歴史叙述の再編・再解釈、新たな叙述の創出を通して、護国を定義・再定義する役割を担った。